

恋愛の詩

udauda

根拠

誰のためでもなく
私は恋に落ちた
あなたのためでも
私のためでもなく

誰に見せるためでもなく
私は恋をした
映画を見て
食事をして
ドライブをして
手を振ってさよなら

今のためでも
未来のためでもなく
私は恋をしている
その恋の向こうに
幸せがなくても
あなたがいれば
想わずにいられない

置く

あなたはあなたを置いていく
ぬかるんだ土の上に置いていく
たおやかな風の中に置いていく
僕の底に置いていく

あなたは代わりに何を拾い
去っていったのか
窓の向こうで吹いている
あなたを含んだ風が

僕はあなたが置いていった
あなたを捨てられないでいる
あなたの影をよぎらせている
あなたと関わりのない場所にも

隣り

確固たる意志はない
でも一步一步を
確かめながら歩いてた

時折見せる
深みのある微笑みに
誘われて

夜の暗闇から
微かにこぼれる光を
追うように

君の隣に居続けようとして
僕はここまでやって来たんだ

どこかへ

僕が僕である限り
僕はいつもここにいる

君が君である限り
君はいつもどこにでも行ける

他人が羨ましく見えるのは
僕が僕に飽きているから

僕はどこかへ行きたくて
違う自分を想像する
今日も君と待ち合わせる

距離

離れてしまって
どれくらいになる
日々が長い
一日が短い

言いたいことが多すぎて
本当の言葉に
たどり着けない

この場所から
僕が何を叫んだとしても
遠くにいる君には
「さよなら」としか聞こえないね

一粒の涙

太陽に照らされながら
すくすくと僕らは大人になって
そして埋めた宝物の在り処を忘れていった

どこからともなく返事は滞り
徐々に薄れゆく青春の色
一粒の涙でつながっていた僕らは
乾いた時が別れ

これまで

変えようのないのは過去
変わりやすいのは記憶

共に過ごすのは現在
それぞれに持ち帰るのは思い出

互いのこれまでが交差する
二人のこれからに

感覚

いつからか

愛は概念でしかなくなっていた

誰かの意見を参考にしなければ

愛も持てなくなっていた

傍にいる人の存在よりも

「愛してる」という台詞を欲しがっていた

言葉でまさぐろうとしていた

二人の間にあるものを

読み取れなくなっていた

君の吐息の余韻の意味を

約束

分かり切ったことを
分からないようにして
この部屋に三時間

恋人が去り
にわか雨が降り
それでまた二時間

明かりを消して
眠りについた途端
激しい感情が窓を開ける

約束など何もない二人だったのに
破り捨てたような痛みだけが
ここに残っている

二人だけなら

人の言葉に
もっと身構えずにいられたならな
搾り出した笑顔に
ついてくるな影

もしも二人だけなら
俺たちはもっと幸せでいられた
罪も愛も
必要なかった

夜明け

震えていた夜を
温めあって過ごした
ただ無我夢中で

落ち着いてきた心は
今度は朝を
恐れ始めて

夜が明ければ
露わになってしまう
二人の間にある境界線

閉じられたカーテンを
開ける勇気もなく
夜は引き延ばされている

会話

誤解から始まる

もう一つの正解

繋ぎ合わせながら

独り言を

二人事に変えていく

僕が生み出した言葉の

新しい意味を

君がいつでも見つけてくれる

相違

好きな映画や
細かな部分のモラル
世の中や他人の見方
その全てが異なる人

言い争い
すれ違い
分かり合えないことさえ
恋をつなげていた

街を歩く時の
付かず離れずの距離
その間にあるものを
信じていた

運命

運命に逆らうように
たどり着いたこの街で
出会えた二人がいる
屈託ない寂しさで
繋がりあい

ふっと吹けば
空に消えていく
脆い想いだから
なおさら深く
結ばれようとしている

証明

書類に押した印鑑は
裁判ぐらいにしか役立たない
すった嵌めた指輪に
感じ始めている違和感

かたちのないものを
形にしてみせても
そこにあるのはただの残骸で

心を捕えるには
不十分だ
どんな約束も
どんな誓いも
抱きしめるそばからこぼれていく
昨日までは確かだと思っていたのに

あこがれ

誰からも好かれる
あなたみたいになりたいと思っていた
あなたの傍にいただけで
あなたみたいになれる気がしていた

みんなに見せる笑顔を
僕にも見せた時
すごく嬉しくて
少し寂しかった

僕は今も僕のまま
毎日の電車で揺られている
あなたは今
どんなあなたでいますか

吹き戻し

あなたは僕の人生の
静寂を乱して
そしてあっという間に去って行った

もう開きたくない窓を
強く揺らし続ける
長いあなたの吹き戻し

ふざける

ケンカした時の
お互いの顔がおかしくて笑う
会話の途中で
ふっとできた間に笑う

待ち合わせしてから離れるまで
ずっとふざけあっていた二人
将来の話なんて
今が続いていればよかった

笑顔で泣いてる僕を
面白がって君が笑う
それが別れの日のハイライト

曖昧でよかった
そうじゃなきゃもたなかった
君ともう少し
ふざけていたかった

二人

一人の時間が長かったせいか
二人の時間の過ごし方が
最後までよく分からなかった

共通する言葉を見つけられずに
会話も続かなかった
急に天気の話なんかしてさ

慣れた一人にただいまして
気付いたことが二つ
僕が恋に向かないことと
それでも君にいてほしかったということ

趣味の時間を取り戻して
僕はこれまでの僕に帰る
好きなものに囲まれた
何か物足りない暮らし

リズム

息継ぎのように
人を求めては出逢い

小さな心臓で
余韻は続くから
想いは続いていられる

ありとあらゆる感情が
優劣なく混じりあう
恋のリズム

雨雲

空の见えないところから
雨が差してくる
これがいつかの雲だったなんて
未だに少し信じられない

重い足を勢いづけようと
歩き始めた街
一人に慣れ過ぎた
右手に傘を持たせて

ニューオープンの店
妙な模様の雑貨が並ぶ
君ならどう思う？
君なら何て言う？

降り始めの雨の強さが
涙の感じに似てる
君なしで生きてこれたなんて
未だに少し信じられない

約束のかわり

ねえ 言葉って
寂しいもんだからさ
もうちょっと飾り付けようよ
てっぺんに星をのせて

ねえ 「愛」って
物足りない響きだからさ
付け足したくなるんだ
「してる」って

甘い言葉を
毎晩たっぷり交わして
後で二人で笑い合おうよ
それが約束のかわりさ

証

悲しみは
色のついた言葉に
染められてしまうけど

歩き出す
一步は過去の破片を
踏みつけてしまうけど

少しずつ
薄れゆく君は
今僕が生きている証

体から
こみ上げてくる
形のない記憶

心残り

何の告白もなく
分かり合える気持ちがあつて

何の決定打もなく
こじれゆく関係があつて

そこにあつた心の揺れを
互いになんとか知っている

過ぎ行く時の中で
解きほぐされるわだかまりがあつて

何を確かめ合った訳もなく
肩寄せあつたりする

心の揺れはまだ消えず
互いの胸で響いている

伝える

見計らうほど
タイミングは掴めず
言いそびれてきた

一人歩きしかけた
想いをもう一度
握りしめ直す

君だけに知られたくなかったことは
君だけに伝えるために
今残されている